



TITLE:

格助詞「の」の認知プロセス--彼女の飼っている猫は茜です--

AUTHOR(S):

尾谷, 昌則

CITATION:

尾谷, 昌則. 格助詞「の」の認知プロセス--彼女の飼っている猫は茜です--. 言語科学論集 1998, 4: 11-27

ISSUE DATE:

1998-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66944>

RIGHT:

格助詞「の」の認知プロセス*

ー彼女の飼っている猫は茜ですー

尾谷昌則

京都大学

e-mail: HZT05753@nifty.ne.jp

1. はじめに

人間の言語能力というものは、広い意味で人間の認知能力の一部である。ゆえに、言語は人間の認知能力と密接な関わりを持っている。それを否定して（もしくは極力排除して）言語を分析、記述するプログラムは、一見客観的で純粋な科学のように見えるかもしれないが、閉じたモジュールの中でのみ発展と進化を繰り返す理論の究極の進化形態は「絶滅」でしかない。言語とは、人間の認知能力の所産であるのだから、言語の本質を研究することはすなわち人間の認知能力を研究することに他ならないのである。¹ 本稿はこの言語観を全面に押し出している認知言語学の視点に立ち、とくに日本語の格助詞（連体助詞）である「の」を取り上げ、辞書に記載されているような逐次的な意味ではなく、「の」の認知的な意味を探る。

2. 「の」の分類

2.1. 「の」の用法

日本語の「の」を『日本文法大辞典』（1971、明治書院）で引いてみると、以下の様に様々な用法がある。

- | | | |
|--------|-----------------------|----------------|
| 1 格助詞 | (1) 私の本 | (所有・所属) |
| | (2) 緑のリボン | (性質・状態) |
| | (3) 父の帰り | (動作の主体) |
| | (4) 反乱軍の鎮圧 | (動作の対象) |
| 2 準体助詞 | (5) これは僕のだ | (～のもの／下の体言の省略) |
| | (6) 駅から遠いのが難点だね | (もの、こと) |
| | (7) よほどうれしかったのだろう | (助動詞につづく) |
| 3 並立助詞 | (8) どのこうのと文句ばかり言う | |
| 4 終助詞 | (9) これは田中さんにもらったの | (断定) |
| | (10) これは田中さんにもらったの？ | (疑問 上昇させる) |
| | (11) あなたは勉強だけしていればいいの | (命令「の」に強勢) |

本稿で扱う「の」は、上の1の用法だけであるが、それでも様々な用法が存在する。1の格助

* 本稿は1998年1月に富山大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。本論文の誤り・誤植などは全て筆者の責任である。

¹ ここでいう「認知」とは、狭い意味での知覚能力を指すものではない。山梨（1998）が指摘しているように、人間が周囲の環境と相互作用（interact）してゆくプロセス全体が広義の「認知」であり、「環境」とは概念化主体（話者）を取り巻く物理的状況以外にも、対人関係、社会的関係をも含めたより広い意味での「環境」である。

詞に関しては、国語辞典によっては、「同格」「材料」と記述してあるなど、その用法は多岐にわたり、一義的に「の」の意味を定義できない。そこで本稿では、これらの「の」の多様な意味に対して Langacker (1993)、中村 (1997a) のような「認知的な意味」を設定することを提案するものである。

本稿では、「の」の中でも特に格助詞に焦点を当てて考察する。そこでまず、格助詞の「の」の用法とその文法的地位について、先行研究を踏まえた上で検討しておく。

2.2. 格助詞(連体助詞)について

格助詞の用法で一番基本的と思われ、また複雑な意味を有しているのが「NP1 の NP2」という形式であろう。例えば、西山 (1991, 1993) によれば、

(12) 太郎の電車

西山 (1991, 1993)

といえ、*「太郎が所有している電車」という「所有」の意味がすぐ思い浮かぶであろうが、別に文脈によっては「太郎が車掌をつとめている電車」でも、「太郎がこれから乗る予定の電車」でもよい。さらに「太郎が設計・製造した電車」、「太郎が運転している電車」、「太郎が清掃を担当する電車」など無数に考えられる。しかし、「NP1 の NP2」という純粹に構造的な場合分けだけでは、これらのどの意味を選択するかまでは決定できず、あくまでもコンテキストが必要となる。先に挙げた様々な意味も、その可能な解釈を列挙しただけにすぎず、「の」の本質を捉えていないことになる。*

さらに、「の」は主格を表わすこともできるとされている。以下の例文 (13) では、「彼女は「飼っている」という述語に対する主格であるとされている。

(13) 彼女の飼っているネコは苗です。

(14) 彼女がネコを飼っている。

(15) #彼女のネコを飼っている

(13) の文は、主格を表す格助詞「が」を使って (14) のように書き換えることができるので、「の」も主格を表すことができるのだと考えるのは理解できる。しかし (14) の文がそのまま「の」を使って (15) のように書き換えられるわけではない。現代語におけるこの用法は、「の」を含む節が全体で体言句を構成する場合にしかできないので、主格の「が」と完全に同一視できるわけではなく、主格とは別の意味を考えなければならないであろう。さらに「の」には、主格だけでなく目的格になる用法もある上に、コンテキストを除外すれば、しばしば主格/目的格の解釈が不明瞭になる場合までもが存在する。

(16) 野菜の出荷/シャツの洗濯/部屋の掃除 (目的格)

(17) 彼の殺人事件/課長の査定/犬の散歩 (主格/目的格の区別が曖昧)

これら様々な「の」の用法を辞書のように、所有、所属、性質、状態、同格、材質、動作の主体、動作の対象、などと分類するだけでは、「NP1 の NP2」の可能な論理的解釈を頻度順に列挙しているだけにすぎない。そしてその解釈とは、西山 (1991, 1993) が指摘しているように、名詞の特性に左右されていることが多く、コンテキストなどを考慮せずに意味を決定することはできない。辞書というものの実用性を考えれば、様々な具体用例を挙げるのは仕方のないことであるが、やはり「の」の本質を捉えようとするならば、「の」の表層的な具体事例(プロトタイプ

ブ)を列挙するだけでは見えてこない。むしろ、それらの奥底に潜む抽象的な意味(スキーマ)の両方を捉えるのが望ましい。

2.3. 準体助詞について

準体助詞という分類は、橋本(1969)に始まるものであり、主に以下の2つの例が挙げられる。

(18) そんな事いふのはまちがいだ。

(19) 弟からののは大きかった。

橋本(1969: 67)

奥津(1986)はこれを松下大三郎にはじまる形式名詞として扱うべきとしている。奥津によれば、橋本は「方」を形式名詞としているが、(18)の「の」も(20)の「方」と同様に句全体を体言化しているのだから、これに近いとして、(+/-自立)(+/-名詞)の観点から(21)のようにならまとめている。

(20) a. あそこにいらっしゃるのが田中さんです。

b. あそこにいらっしゃる方が田中さんです。

奥津(1986)

(21)		+自立	-自立
	+名詞	田中さん	方、の
	-名詞	いらっしゃる	です

奥津(1986)

では、どうして橋本はこのように分類してしまったのだろうか？ それは、連体助詞の「の」との関連で考えたからだろうと考えられる。「弟からの本」の「の」は連体助詞だが、この「本」は文脈があれば(19)のように省略できる。しかし「大きいのがほしい」の場合には「の」の後ろの名詞が省略されたと考えことはできず、むしろ「の」が代名詞のように振る舞っている。ゆえに、一見同じに見えるこの2つの「の」を区別する必要がある。

佐治(1993)では、準体助詞の「の」を以下のように分類/命名している。まず、後続の名詞が省略された「の」だが、これを『下略の「の」』としている。

(22) 僕の(辞書)はS社のだ。

(23)のように、実質的に何かを指示する「の」は『準代名詞』とされている。確かに代名詞に似ている。また、この「の」を被修飾語と見なすと、<内の関係>の修飾になっている。

(23) 私が買ったのはこれだ。 (「の」は「もの」などと置き換え可能)

そして、節全体を体言化する「の」については、これを『狭義準体助詞』としている。

(24) 私が壊したのを誰に聞いたの？

佐治(1993)は依然として「準体助詞」なる用語を使っているが、この3つを明白に区別している点だけは認めざるを得ない。しかし、それぞれ3つの命名だけは、奥津(1986)の議論

もあるので、再考する必要がある。『下略の「の」』に関しては、格助詞の「の」に後続する名詞が省略されただけなので、そのまま格助詞とすべきであろう。

- (25) 僕の(辞書)はS社のだ。 (格助詞)

『準代名詞』に関しては、確かに先行詞を受けて代名詞のように用いられることもあり、「もの」などで代用できるので、やはり助詞ではなく、佐治の指摘する通り「準代名詞」とする。

- (26) a. 私が買った(の/もの)はこれです。 (準代名詞)
b. 手に持っている(の/もの)を見せなさい。

『狭義準体助詞』に関しては、節を体言化して文の argument とするのだから、本稿では暫定的に「補文化辞」としておく。

- (27) 父が死んだ(の/こと/というの/ということ)は秘密だ。

ここで一つ注意しておきたいのは、『準代名詞』と『狭義準体助詞』の区別についてである。この2つの「の」の区別は、後続の要素によって初めて決まることがある(尾谷 1998)。

- (28) a. 私が買ったのはこれだ。 (準代名詞)
b. 私が買ったのは内緒にしてほしい。 (準代名詞/狭義準体助詞)
c. 私が買ったのは昨日だ。 (狭義準体助詞)

「これだ」という実質的なモノを指す言葉が後に続けば、「の」は準代名詞の解釈しかなくなる。しかし、「内緒にしてほしい」というのは、「買った物」が内緒なのか「買ったという事」が内緒なのか曖昧である。つまり、モノを指すかコトを指すかで曖昧となっているのである。ところが「昨日だ」と続けば、出来事(コト)を指す解釈しかなくなる。これこそが「の」の本質的特徴の1つであり、このような曖昧さは「もの」や「こと」といった形式名詞を用いた場合には起らない。

- (29) a. 私が買ったものは内緒にしてほしい。 (モノ解釈のみ)
b. 私が買ったことは内緒にしてほしい。 (コト解釈のみ)

さて、佐治が分類している準体助詞の「の」の3用法を再検討した結果、以下のように再分類されることが明らかになった。

- (30) 『下略の「の」』 ----> 格助詞
『準代名詞』 ----> 準代名詞 (形式名詞)
『狭義準体助詞』 ----> 補文化辞 (形式名詞)

『下略の「の」』については、後続の名詞が省略され、格助詞だけが残ったものであるのもので、準体助詞とは見なさず格助詞とする。『準代名詞』については、奥津の分析に従い形式名詞とするが、節全体を体言句とする『狭義準体助詞』も形式名詞であるので、この2つは敢えて分けて分類したい。そこで『準代名詞』については、確かに先行する名詞を受けて代名詞のように振る

舞うので、そのまま『準代名詞』とする。『狭義準体助詞』については、既存の概念である補文化辞とその機能が同じであると考えられるので、補文化辞としておく。

3. 参照点 (Reference-Point)

2節では、「の」がどのような機能を果たすものであるかを、伝統的な文法観から見た後で、さらに認知文法の観点から「の」が担うとみられる参照点機能について見ておく。

3.1. Grammatical Category の機能

伝統的に、「語」という概念は内容語と機能語という2つに分類されてきた。これについて、Sweet (1891:22) は以下のように述べている。

- (31) ".... Such words as "the" and "is", (....) , though independent inform, are not independent in meaning: "the" and "is" by themselves do not convey any ideas, as "earth" and "round" do. We call such words as "the" and "is" form-words, because they are words in form only." (Sweet 1891: 22)

1つは具体的／実質的な意味を担うと考えられる内容語で、もう1つはそれほど実質的な意味がなく、むしろ形式的な語とされる機能語であり、研究者達によって様々な呼び方がなされてきた。しかしどれも共通しているのは、何かしらの実質的な概念を指示する語が内容語で、機能語は具体的な意味を担っているわけではなく、むしろ形式的なものであるという見方である。

しかし、機能語に全く意味がないということにはならない。語として成立しているからには、何かしらの意味を有しているはずである。それでは、機能語の持つ意味とは何であろうか？ この問題に関しては、Langacker (1997: 1) の以下の引用が参考になる。

- (32) "Either a thing or a relationship can be profiled. (...) a noun profiles a thing, whereas verbs, adjectives, adverbs, prepositions, participles, and infinitives profile various sorts of relationships." (Langacker 1997: 1)

名詞が実質的なモノを表わし、それ以外はそれらモノ同士の様々な関係を表わすというものであり、多少の誤解を恐れずに言えば、内容語に相当するのが前者、機能語に相当するのが後者であると言ってよいであろう。中村 (1997a) はさらにその考えを明確に打ち出している。

- (33) 『文法的要素 (本稿でいう機能語) は、話し手や聞き手である認知主体が対象に対してどのような心的アクセスをしているか (how the speech-act participants have succeeded in establishing mental contact with that particular instance, Langacker 1990: 331)、その認知プロセスを表わしている。
(中略) すなわち、語彙的要素 (本稿でいう内容語) と文法的要素から成る言語表現は、(中略) 認知主体が対象との相互作用を通して、その対象をどのように捉えているか (construal) をも表現している。そしてその際、語彙的要素が具体的な意味内容を、文法要素が認知主体の認知プロセスを表わす (中村 1997a)。』

「認知主体が対象に対してどのような心的アクセスをしているか」というのは、例えば下の図の

ような違いである。英語の all, any, every, each において、all はカテゴリー全体を問題にするのに対して、any は任意の一つを問題としている。every と each はカテゴリーの成員それぞれ1つずつが問題にされるが、each は1つずつが順番に認知される感じがする。²

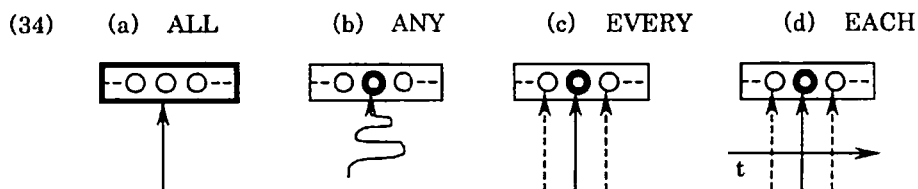


図1 Langacker (1988: 8)

ここで指摘しておきたいのは、助詞の「の」も文法範疇（機能語）であるということである。つまり「の」は内容語のように具体的な意味を有すると考えるよりも、それら内容語に付随して、その内容語に対して認知主体がどのように心的アクセスしているのかという認知プロセスを表わしていると考えべきなのである。辞書などに記載されている「所有」「所属」「性質」「状態」「同格」「材質」「動作の主体」「動作の対象」などの意味は、この認知プロセスのほんの一例を示しただけに過ぎないのである。

3.2. Reference Point

さて、「の」が「対象に対する心的アクセスの仕方」を示すものであるのはよいとして、それは一体どのようなものであろうか？ 本稿では、それが Langacker (1993) のいう Reference Point ability (参照点能力) であると主張する。つまり「X の Y」といえば、X という概念に訴えて対象 Y へと心的アクセスしているという意味なのである。これこそが「の」の意味なのであり、それ以上の意味はないのである。X と Y の関係が「所有」であつたり「所属」や「主格」「目的格」「同格」であつたりするのは、あくまでも X と Y の語彙意味やコンテキストが決定しているのであって、「の」に固有の意味ではないのである。

さて、多少結論を先取りしてしまったが、ここでは参照点という概念について見ておきたい。これについて Langacker (1993: 5) は次のように述べている。

- (35) "... [reference point] is best described as the ability to invoke the conception of one entity for purpose of establishing mental contact with another, i.e., to single it out individual conscious awareness. ... For example, I deliberately use a perceptual reference point when I locate the North Star by mentally tracing a path along the end of the Big Dipper." (Langacker 1993: 5)

これは、元々は空間的な概念である。例えば、ある建物の位置を説明する際には、我々は「～の横」「～の後ろ」などと言い、なにか別のものを基準にして、言いたい建物の場所を相対化して表現する。その際に基準として使うのが参照点である。このようなことは、我々の認知活動においては何ら意識せずに行われている。そして、我々にとってこれほど基本的なこの認知能力は、何も空間ドメインに限ったことではない。この認知の営みは、空間表現以外にも幅広く見られる。そして Langacker が言うところの参照点とは、空間以外のものをも含めてより広い、抽象的な

² 詳しくは、Langacker (1988:8) を参照のこと。

参照点なのである。中村 (1997a.) はこれを「認知的手掛かり」と表現している。そして、参照点がどのようにして選択されるかについては、Langacker (1993: 6) は次のように述べている。

- (36) "The intent is to indicate that the reference point has a certain cognitive salience, either intrinsic or contextually determined. It is, of course, owing to some kind of salience that an entity comes to be chosen as a reference point in the first place." (Langacker 1993: 6)

参照点に選ばれる対象は、ある一定の際立ちを有するものに限られる。その際の際立ちとは、あくまでもターゲットへと心的アクセスする際に便利なもの程ふさわしい。つまり談話の状況などに応じて臨機応変に我々は参照点を選択するのであり、必ずこれが参照点に選ばれるというようなモノは存在しない。参照点の構造を図示すると、以下のようになる。R は参照点を表わし、T はその参照点を通じて言及されるターゲットであり、D (ドミニオン) はその参照点によって想起される潜在的な T の集合である。ゆえに、T が D の外側に位置する図などはありえない。このように、R を「認知的手掛かり」として T に言及するのが参照点の機能である。

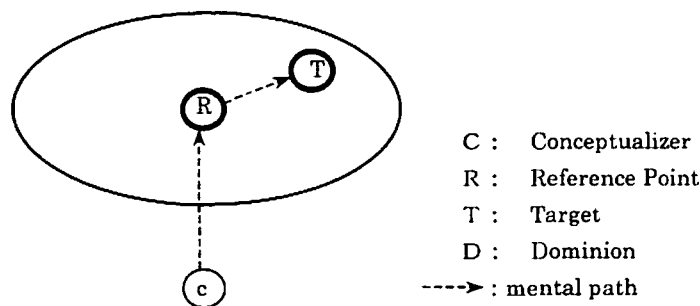


図 2

Langacker (1993: 6)

Langacker (1993) は英語の of 句 を「参照点構文」の 1 つと見なしており、中村 (1997a.) も認知的にあるモノを同定する際の「認知的手掛かり」になっているとしている。学習辞典などで of の意味として「所属」「起源」「分離」などが列挙されているのは、何かを同定する際の「認知的手掛かり」になりやすいモノのプロトタイプを列挙しているのである。前節でも述べたが、そのような典型事例を列挙するだけでは of 句の本質を捉えたことにはならない。Langacker も主張しているように、典型事例とはスキーマが具現化されたものであるから、典型事例を列挙するだけの分析は表面的な解釈のバリエーションでしかない。そこで、この 2 つのレベルを明確に区別して研究する必要がある。これに従えば、of 句の意味は以下ようになる (中村 1997a.)。

- (37) a. 認知プロセス (スキーマ的意味) ・ ・ ・ ・ ・ 「認知的手掛かり」
b. プロトタイプ事例の意味 ・ ・ ・ ・ ・ 「所属」「起源」「分離」など

単純に考えれば、日本語の「の」も「認知的手掛かり」を示しているとする方が、(12)(17)(18)(19) で見られる様々な用法を動機付けるには都合がよい。しかし、「の」は「of」と全く同じ語ではないのですぐに決めつけることはできないが、それでもその可能性は否定できない。そこで本稿では、「の」が「認知的手掛かり」としての参照点機能を有していると仮定し、次節でその考えを適用して様々な「の」について考察してゆく。

- (38) a. 認知プロセス (スキーマ的意味)・・・「認知の手掛かり」(参照点)
 b. プロトタイプ事例の意味・・・「所有」「主格」「同格」など

3.3. Active-Zone

「の」の分析の前に、ここで参照点にかかわる重要な概念を1つ見ておきたい。それは active-zone (活性領域) と呼ばれる概念であり、次のように言われている。

- (39) "Those facets of an entity capable of interacting directly with a given domain or relation are referred to as the active-zone of the entity with respect to the domain or relation in question. (Langacker 1987: 272)

これは、現象と直接的に関わっているが言語表現には現われていないモノを指す概念であり、例えばメトニミーと呼ばれる現象もこの active-zone(az.)現象の1つとされている。

- (40) a. 犬が猫に噛みついた。 b. She heard a trumpet.

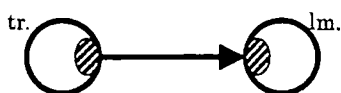


図3

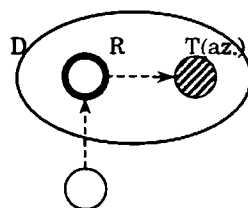


図4

(40.a.) においては、プロファイルされているのは「犬」と「猫」であるが、実際に噛みつくという行為に直接的に関与しているのは犬の口の部分だけであり、噛まれているのも猫の体の一部だけである。しかしそこまで厳密に表現せずとも言語によるコミュニケーションには何の支障も生じない。ゆえに細かい所まではプロファイルせずに、活性領域としてある。この活性領域という概念は、何も身体部位の一部を指すばかりではない。(40b.) では、trumpet がプロファイルされているものの、トランペットそのものを「聴く」わけではない。実際に聴くのはトランペットの「音」である。ゆえにこの場合、プロファイルされている概念(トランペット)と実際の現象に直接的に関わっているもの(トランペットの音)が完全には一致しない。このとき、プロファイルされている「トランペット」は参照点の働きをし、実際に現象に直接関与している「音」は参照点の活性領域ということになる。

さらに次の例を見てほしい。(41a.) において、プロファイルされている参照点は「him」であるが、その活性領域は(実際に叩かれたのは)体の一部であり、それを図示すると図3のようになる。(41b.) では、(41a.) で活性領域となっていた箇所がプロファイルされ、言語化されている。これは active-zone specification (活性領域の特定) とでも言えるものであり(中村芳久先生、私信)、図示すると図4のように「shoulder」にあたる部分がプロファイルされているので太線で表される。

(41) a. I hit him.

b. I hit him on the shoulder.

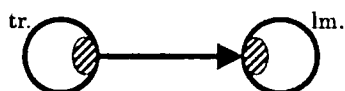


図 5



図 6

3.4. 参照点構造の4パターン

最後に、考えられる参照点構造のパターンを提示しておく。参照点によって想起されるドミニオンは潜在的なターゲットの集合であるから $D \supseteq T$ である。そこから考えられる可能な参照点構造は以下の4パターンである。

タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4

図 7

まずタイプ1だが、これは参照点がドミニオンにもなっている例である。具体例を1つ挙げれば「the book in the shelf」などであろう。ターゲットは当然「book」であるが、そのターゲットを同定する際に（ターゲットにメンタルアクセスする際に）「本棚の中」というサーチドメインが設定されている。このように「shelf」を参照点として用いることで、その中にある「the book」へとメンタルアクセスを達成しているのである。

次にタイプ2だが、これは参照点のドミニオン自体がターゲットになっている現象である。＜部分で全体を表わす＞というメトニミーは、この好例を言えよう。忙しい時に「手が足りない」といえば、この参照点は「手」であり、ターゲットは当然「人間」を指している。このとき「人間」は「全体」で、「手」はその「部分」であり、「人間」の「手」の間にはベースとプロファイルの関係が成立している。

タイプ3は参照点とターゲットが全くの別のものを指す場合であり、かつドミニオンの中に参照点がある場合である。その例としては、「家のそばに車がある」などである。この場合、「家」という参照点を介してターゲットである「車」にメンタルアクセスしている。この場合のドミニオンは参照点である「家」の周辺の空間を指す。さらには(40b)のような、隣接関係にあるものを間接的に表わすメトニミー表現の場合もこれにあたると思われる。

最後にタイプ4であるが、これは参照点がターゲットと同一の場合である。論理的に考えれば、参照点とはターゲットにメンタルアクセスするために用いるものであるから、それが同一というのは矛盾なのであるが、対応する言語表現が考えられないこともない。例えば「僕は僕。」というトートロジー表現などがあるが、このタイプ4について議論するのが本稿の趣旨ではないので、

別に機会を設けることにする。

4. 「の」の参照点機能

4.1. 格助詞の「の」

前節では、参照点の説明と予想される参照点構造のパターンを具体例と共に挙げたが、本節では格助詞「の」の様々な用法が、以上で見てきた参照点構造の観点から包括的に捉えることができるということを多様な例を通じて提示してゆく。

4.1.1. 「父の本」

まず考えられるのが「NP1 の NP2」で、これは格助詞の典型的な使用例である。この場合、西山（1991, 1993）が論じているように、名詞自体の意味特性が大きく左右する。例えば「父の本」となれば、「父」と「本」は全く別の存在なのでタイプ3の参照点構造になる。

(42) a. 父の本

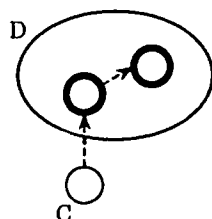


図 8

b. 父の

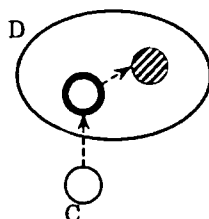


図 9

(尾谷 1997a,b,1998)

(42a.) では、ターゲットの「本」にメンタルコンタクトするために「父」が参照点として用いられている。この時の「の」が必ずしも「所有」の意味にはならないというのは (12) でも見た通りである。「所有」を含めて可能な解釈の数は、文脈の数だけ存在するわけであるが、「の」のスキーマ的意味（認知プロセス）はただ1つ「参照点」である。つまり、「の」の前にある要素を参照点として用いて、「の」の後ろにある要素へとメンタルコンタクトをとる」というものである。

さらに (42b) であるが、これは一番重要なターゲットである「本」が表現されてない。しかし、それでもなお (42b) が何か具体的なモノを指していることには変わりない。これは何故だろうか。「父」や「本」は、Langacker（1987, 1991）でいう thing を表わすものであり、図の中ではそれぞれ円で表わされている。そして肝心の「の」であるが、これは認知主体の対象へのメンタルコンタクトを表わすものであるから、図の中では、mental path を表わす波線の矢印に対応していると考えられる。そうすると、「本」が省略されてもなお (42b) が何か具体的なモノを指すことができるのは、「の」によって参照点を經由してターゲットへとメンタルコンタクトを達成することが保証されているからと考えられる。この「の」による保証があるからこそ、ターゲットの「本」を省略した表現である「父の」が何か具体的なモノを指示することができるのである。このことは、「の」を省略した表現 (43b) が省略される前の表現 (43a) と同じ意味にならないことからわかる。

(43) a. 父のを借りてきた。

b. #父を借りてきた。

(尾谷 1997a,b,1998)

「父の」といえば、「父」を参照点として何らかのターゲットにメンタルコンタクトをとることが「の」によって保証されているので、父に関連する何かを借りてきたという解釈になる。そしてこの時のターゲットは、文脈から同定される。ところが(43b)のように参照点を表す「の」までも省略してしまうと、ターゲットへのメンタルコンタクトを保証するものがなくなるので、文字通り「父」しか意味しなくなる。このように、「の」は参照点を通じてターゲットへのメンタルコンタクトを保証してくれており、これこそが「の」の認知プロセスなのである。

4.1.2. 「長髪は雇わない」 —部分から全体へ—

さて、次はタイプ2に相当する表現である。タイプ2はターゲットがドミニオン(ベース)になっている場合であるので、いわゆる「部分で全体を表わす」というメトニミーなどに適用される。まずは「長髪の人(は雇わない)」という例を考えてみよう。

(44) 長髪の人 (は雇わない)

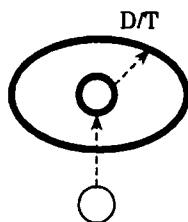


図 10

「長髪の人」も、統語構造は「NP1 の NP2」であるが、これまで見てきた表現とはやはり名詞の特性が異なる。参照点は「長髪」という身体部位であり、そのドミニオンは「長髪」になっている人間そのものとなる。そしてターゲットも「長髪」を持つ人間そのものである。つまり、「長髪」を認知的手掛かりとして「人」にメンタルコンタクトをとっている。

ここで面白い問題が生じる。(42)(43)で見たように、文脈さえあればターゲット名詞句を省略しても構わないが、しかし「の」までも省略することはできなかった。これは、「の」が参照点を介してターゲットへとメンタルコンタクトをとることを保証する働きがあるので、「の」までも省略してしまうとは字義通りの意味しか表せないからである。ところが、「長髪の人」の場合、ターゲット名詞句の「人」はもちろんのこと、「の」までも省略可能なのである。

(45) 長髪 (は雇わない。)

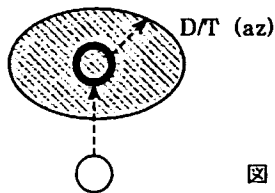


図 11

参照点を介してターゲットへとメンタルコンタクトを保証する「の」を省略しても尚、この文の論理の意味は変わらない。省略しても支障ないということは、この例は「の」の参照点機能への反例とも考えられるが、一見例外のように見えるこの現象は名詞の特性に起因している。(42)の「父の本」という表現における名詞句「父」と「本」は全く別個の存在物であるため、メンタルパスを保証する「の」を省略してしまうと、「父」から「本」へのメンタルコンタクトが保証されず、文字通り「父」という意味しか表せない。これは(43)でも見た通りである。しかし「長髪の人」という表現においては、「長髪」は「人」にとっては不可分といってもよい身体部位である。そのため「長髪」が「雇わない」という述語の意味から類推されて、ターゲットが「人」

であるということが容易に理解できるわけである。つまり「人」と「長髪」の間にはベースとプロフィールの関係が成り立っているので、身体部位の「長髪」がプロフィールされれば、そのベースである「人」も必然的に（もしくは容易に）想起され得るので、わざわざメンタルパスを保証する「の」が無くとも容易にターゲットである「人」へとメンタルコンタクトをとることができるのである。つまり、「人」と「長髪」という名詞同士の特性としてすでに参照点構造が保証されているので、いちいち参照点を表す「の」を使用せずとも問題ないのである。ゆえにこの例は、「の」の参照点機能に対する反例どころか、むしろサポート事例となっているのである。

4.1.3. 「父の手」

次に「父の手」という表現をみてみよう。この表現は(42)と同じく「NP1のNP2」という統語構造であるが、名詞の特性が異なる。「手」は身体部位であるので、身体そのものが「手」に対するベースになっているので、それがサーチドメイン（つまりドミニオン）として喚起されている。ベースが参照点となっているために、タイプ1の参照点構造である。

(46) 父の手

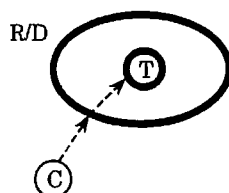


図 12

ここでは、ターゲット名詞句が「手」という身体部位であるから、その手のベースである「父」を参照点として「手」にメンタルコンタクトをとっている。ゆえにこの場合のドミニオンはベースである父の身体そのものである。

4.1.4. 「箱の中の手紙」

さて、これまででタイプ1からタイプ3まで見てきたわけであるが、今度はそれらの複合形についても見ておこう。例えば「箱の中の手紙」という表現である。これは2つの参照点構造の複合形である。「箱の中」といった場合、参照点は勿論「箱」で、ターゲットはその箱の「中」という空間である。この場合の「中」とは当然「箱」の内部の空間を指す表現であるから、ターゲットは参照点の中に存在する。この時点でターゲットであった「中」が、次の段階では参照点兼ドミニオンになって、ターゲットである「手紙」へのメンタルコンタクトを助けている。Langacker (1993) はこのような「入れ子型」の構造を *nesting effect* と呼んでおり、その参照点構造は図13のようになる。

(47) 箱の中の手紙

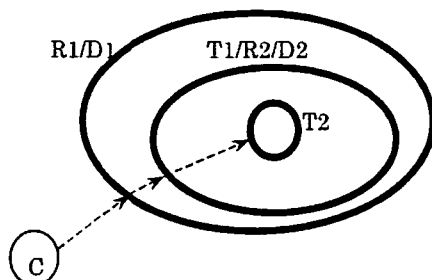


図 13

この *nesting effect* は、様々な言語表現に用いられている。Langacker 自身も以下のような例を

挙げている。

- (48) a. *Your copy of Women, Fire, and Dangerous Things is downstairs in the study in the bookcase on the bottom shelf next to the Illustrated Encyclopedia of Glottochronology.*
 b. *The Lexicostatistics Museum is across the plaza, through that alley, and over the bridge.* Langacker (1993:26)

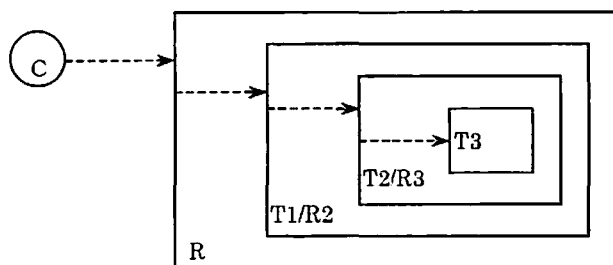


図 14

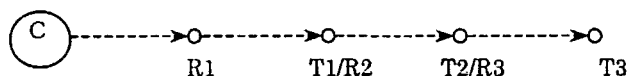


図 15

Langacker (1993:28)

このように、最初はターゲットであったものが次なる参照点となり、さらに別のターゲットへとメンタルコンタクトを繰り返すような現象は、何も珍しいものではない。むしろここで特筆すべきは、日英語の違いであろう。英語の場合（特に空間関係を示す場合が顕著である）、ターゲットと参照点は前置詞を介して表現されている。ゆえに、前置詞が参照点機能を果たしているということになる。

- (49) a. a letter in the box
 b. 箱の中の手紙

ところが (49a) を日本語に翻訳すると、「箱」と「手紙」以外にもう1つ「中」という名詞を使わなければならない。これは世界の切り取り方が日本語と英語で異なっているという証拠である。英語の前置詞 *in* は、日本語の「の」とは異なり、ただの参照点マーカーではない。「の」は単なる参照点マーカーであって、参照点とターゲットの関係は様々に解釈できるが、英語の前置詞 *in* は、その解釈が「参照点の内部にターゲットが位置する」という解釈がプロトタイプであり、「の」よりもかなり特定化された参照点マーカーなのである。つまり英語の前置詞は全て、ある種の固有の解釈を持った参照点マーカーということである。ところが日本語の場合、「の」は参照点機能しか果たさず、ある種の特定の解釈が必要な場合は参照点とターゲットを直接「の」で結びつけず、それらの間にもう1つの参照点を挟むのである。例文 (49b) の場合、それが「中」という名詞なのである。日本語は、このような特定の空間を表す名詞句が発達している言語であるが、英語はそのような特定の空間を示す意味と参照点機能が1つの前置詞に *incorporate* されている言語なのである。ゆえに英語で問題とされることが多かった前置詞句主語構文も、日本語では全く問題にならない。

(50) Beside the fire is warmer.

Langacker (1997)

(51) 火の側が暖かい。

日本語の「側」という空間名詞は、何か参照点となるモノの周囲の空間全体を示す名詞であるが、英語の *beside* は基本的には名詞ではなく前置詞であり、参照点とターゲットが近い位置に存在するという意味を表すだけのものである。ゆえに、本来は参照点の周囲の空間全体を意味する語ではないのだが、臨時的に (52b) のように参照点の周囲の空間そのものをプロファイルしたものが前置詞主語構文なのである。

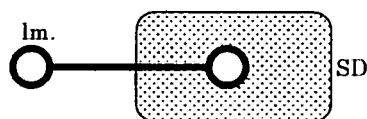
(52) a. *beside*

図 16

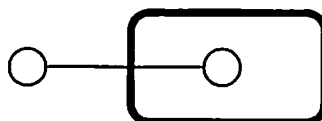
b. *beside* (=N)

図 17

Langacker (1997)

4.1.5. 「母の読書」

次に、「母の読書」というのを考えてみよう。これは統語的には「NP1 の NP2」と全く同じであるが、今までと異なるのは NP2 が行為名詞になっていることである。基本的には行為名詞も名詞なのだから、参照点構造で表わすことができる。ただ、NP2 の内部構造が違うだけである。まずは行為名詞「読書」についてであるが、これは Langacker (1987) にあるとおり、動詞が時間的なプロファイルファイルがあるプロセスを表わし、行為名詞はそうした状態の連続全体を1つの領域として捉えたもの、と考えられている。ゆえに、「読書する」という動詞には、図 18 のように時間軸があり、そういった状態がプロセスとして続くことを表わしている。一方、その時間的プロセスを捨象したものが図 19 の名詞「読書」である。

(53) a. 読書する

b. 読書

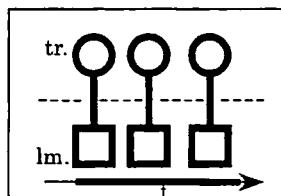


図 18

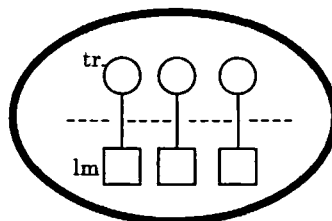


図 19

以上のことから、「母の読書」は (49) のように「母」が参照点になり、母の行為である「読書」全体がターゲットとなりプロファイルされる。

(54) 母の読書

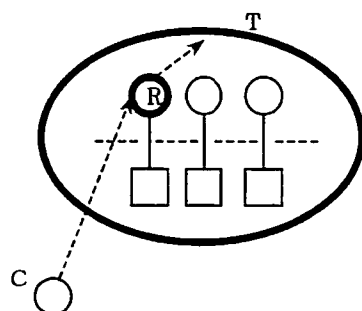


図 20

4.1.6. 「彼女の飼っている猫」 — ガ-ノ交替 —

「の」が参照点機能を有していることを考慮することで、ある1つの現象が自然に説明できるようになる。それは「ガ-ノ交替」と呼ばれている現象である。これは以下の例のように、主格や目的格の「が」が「の」で置き換えられるというものである。

(55) a. 彼女が飼っている猫

b. 彼女の飼っている猫

(56) a. 英語が話せる青年

b. 英語の話せる青年

しかし、主格や目的格であれば全ての「が」を「の」で置き換えることができるというわけではない。「が」を含む節が1つの体言句を形成していなければ「の」で交替することができないという制約がある。

(57) a. 彼女がネコを飼っている。

b. *彼女の猫を飼っている。

(58) a. その青年が英語を話す。

b. *その青年の英を語話す。

このような現象に対して、生成文法による研究では「ガとノの交替を任意変形（の規則）として立てる必要がある（井上 1976:227）」とするだけで、何故このような交替が可能であるかを動機付けることができない。しかし、節全体が1つの体言句を構成する場合のみ交替が可能であるという制約から考えると、Shibatani (1975) も指摘するように、「NP1 の NP2」という統語構造との類似性を尊重すべきであろう。そしてこの「NP1 の NP2」という構造は、本稿がこれまで検討してきた格助詞「の」の参照点構造そのものである。逆を言えば、「NP1 の NP2」と解釈できる場合にしか「ガ-ノ交替」が起こらないのであるから、「NP1 の NP2」という参照点構造になっている場合にしか「ガ-ノ交替」が起こらないということでもある。中村 (1997b.) も指摘しているように、「の」が句レベルの参照点だとすれば、「が」は節レベルの参照点を表している。よってこの現象は、「の」が参照点機能を有することを考慮すれば自然に説明がつく問題なのである。

(59) a. 彼女の飼っている猫

b. 英語の話せる青年

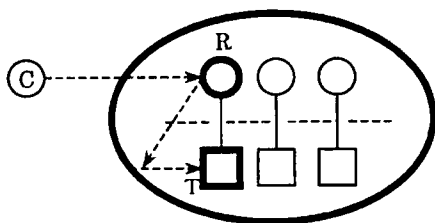


図 21

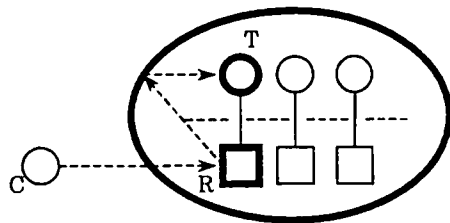


図 22

図 21 では、「僕」が参照点(R)になっており、それを介して最終的なターゲット(T)である「猫」へとメンタルコンタクトが達成されている。

この交替が許されるのは、「が」が節レベルの参照点として機能しているからである。ゆえに、同じ目的格であっても「を」格でしか表現できない目的格場合は「の」で交替できない。この原因は、やはり「を」に参照点機能がないからであると考えられる。

- (60) a. 英語を勉強している青年
b. *英語の勉強している青年

5. 最後に

本稿では日本語の格助詞「の」のスキーマ意味（認知プロセス）が参照点機能（認知的手掛かり）であるということを見てきた。これまでの研究では、「の」の用法を細分化する方向の研究が多かったが、それらの用法は文脈によって解釈可能な「の」の具体事例であって、「の」の本質ではない。「の」の本質はターゲットへとメンタルコンタクトを達成する際に用いる参照点をマークするという認知的意味を有しており、さらにはターゲットがプロファイルされていない場合でも、活性領域という形でターゲットでのメンタルコンタクトを保証するという機能までも有していることを明らかにした。また、「の」の参照点機能を考慮することで「ガーノ交替」も自然に動機付けることができた。今回は格助詞の「の」に絞って議論したが、準代名詞／補文化辞の「の」も参照点機能を有していると考えられ、それを考慮することで自然な説明がつく現象も多々ある（尾谷 1998）。また、「の」だけに限らず参照点構造は他にも様々な言語表現に反映されているのが、それらの詳細については稿を改めることにする。

参考文献

- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. "An Overview of cognitive Grammar." *Topics in cognitive Linguistics*. ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, pp.3-48, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*. Vol.4, No.1, pp.1-38.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Raising and Transparency." *Language*. Vol.71, pp.1-62.
- Langacker, Ronald W. 1997. "Dynamic Conceptualization." Lecture given at University of Tokyo.
- Sweet, Henry. 1891. *A New English Grammar: Logical and Historical, Part 1*. London. Oxford University Press.
- 橋本進吉 1969.『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 松下大三郎 1928.『改撰標準日本文法』紀元社(復刊 1974年 勉誠社)
- 中村芳久 1997a.「認知的言語分析の核心」,『金沢大学文学部論集 言語・文学編』, 17号, pp.25-43.
- 中村芳久 1997b.「認知類型論の試み」第22回関西言語学会シンポジウム口頭発表資料.
- 西山佑司 1990.「「カキ料理は広島が本場だ」構文について一飽和名詞句と非飽和名詞句一」,『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』22号, pp.169-188.
- 西山佑司 1991.「「NP1のNP2」の曖昧性について」,『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』23号, pp.61-82.
- 西山佑司 1993.「「NP1のNP2」と「NP2 of NP1」」,『日本語学』Vol.12, No.11, pp.65-71.
- 尾谷昌則 1997a.「「の」の参照点機能 一僕の買ったのが机の上にあったのを妹が壊した一」第29回白馬夏期言語学会口頭発表資料.
- 尾谷昌則 1997b.「主要部内在型関係節と「の」の参照点機能」,『日本語学会第114回大会予稿集』, pp.210-215.
- 尾谷昌則 1998.「構文の拡張とその動機付けに関する認知論的考察 一いわゆる主要部内在型関係節について一」, 富山大学大学院修士論文.
- 奥津敏一郎 1986.『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 佐治圭三 1993.「「の」の本質一「こと」「もの」との比較から」,『日本語学』Vol.12, No.11, pp.41-46.
- 山梨正明 1998.「感性・身体性に根ざす言語」,『言語』, Vol.27, No6, pp.26-33.

参照辞典

『日本文法大辞典』(1971、松村明(編) 明治書院)